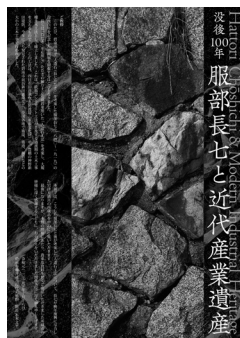


「没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産」展の開催と 前浜新田干拓堤防護岸の発見

豆田 誠路



展示パンフレット表紙



「没後100年 服部長七と近代産業遺産」展展示風景

現在の愛知県碧南市出身で「人造石（長七たたき）」を考案した服部長七（一八四〇～一九一九）が没してから二〇一九（令和元）年で百年を迎えた。このことを記念し、碧南市・碧南市教育委員会では、同年一月一八日から一月一七日まで碧南市藤井達吉現代美術館において、歴史系企画展「没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産」（以下、「本展」という。）を開催したところである。その展示準備の過程において、服部長七の出生地である碧南市域で初めて、長七が手がけた人造石工法の護岸が確認された（前浜新田干拓堤防護岸）。

上記の経緯を踏まえつつ、本稿では、本展開催の経緯とねらい・内容、碧南市における服部長七の事績が現在の碧南市に与えている事柄、企画展で取り上げた服部組の番頭・岡本小治郎氏に関わる史料内容や前浜新田護岸の発見経緯、それを受けての今後の取組み目標などについて述べていきたい。

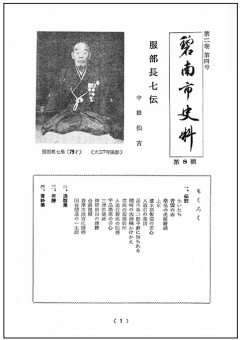
一 本展開催の経緯とねらい・内容

（一）碧南市におけるこれまでの取組み

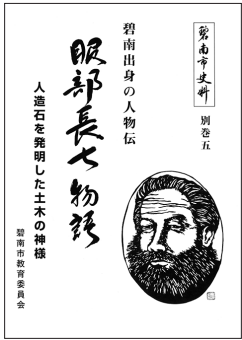
服部長七は、一八四〇（天保一一）年に三河国碧海郡棚尾村西山（現碧南市）に生まれ、明治年間に人造石工法を考案し、これを全国に普及させた土木事業家である。晩年は岩津天満宮（岡崎市）の復興に尽力し、一九一九（大正八）年に死去した。本葬儀は、出生地の近くの精界寺（碧南市）で執り行われている。こうしたことから、服部長七の顕彰は岩津天満宮を中心に、出生地の碧南でも行われてきた。ここでは、碧南市・碧南市教育委員会が取り組んだ服部長七の顕彰のなかから、本展の開催以前に刊行された二点の伝記・物語を紹介する。

① 中根仙吉「服部長七伝」一九五五年

『碧南市史料』第八輯（碧南市役所内 碧南市史編纂会）で発行された服部長七の伝記である。著者は当時碧南市立大浜中学校教諭、のち教育長。内容は伝記・逸話集・年譜・資料集からなる。刊行当時の関係者への聞き取り内容の収録等、特に伝記や逸話集が服部長七の人物像を理解するのに重宝されている。



「服部長七伝」



「服部長七物語」

② 浅井久夫『服部長七物語』二〇一〇年
『碧南市史料』別巻五（碧南市教育委員会）で発行された服部長七の物語である。著者は碧南市市史資料調査員で、『藤井達吉物語』をはじめとした碧南出身・ゆかりの人物伝を物語形式で数多く執筆している。本物語も、ひろく小学校高学年から大人の読者を想定して執筆している。同内容で装丁を変更した岩津天満宮版が翌年発行された。

（二）歴史系企画展「没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産」

① 経緯

このように、碧南市・碧南市教育委員会では、折に触れて服部長七の顕彰に努めてきた。こうした自然な流れのなかで、服部長七の没後百年を迎えた二〇一九（令和元）年に、記念の企画展を企画し、開催するはこびとなった。

② ねらい

碧南市におけるこれまでの取組みから、服部長七の人物像という観点では調査研究が進んだといえる。しかし、そもそも服部長七が考案した「人造石」とは何か、どのようにしたら固まるのか、という基本的な事柄について、担当学芸員である筆者自身がよく理解していなかった。そうしたことを踏まえ、本展では服部長七の人物像（文系的要素）と、長七が考案した人造石・人造石工法（理系的要素）の双方について、バランスよく理解を深めて頂くことを展示のねらいとした。幸い、人造石工法について長年研究されている天野武弘氏の論考や講演に接することがあり、天野氏の御協力をいただきながら展示準備をすることができたのは幸いであった。

③ 開催内容

（ア）展示

概要は次のとおりである。

- 名称…没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産
- 会期…二〇一九（令和元）年一〇月一八日～十一月一七日
- 会場…碧南市藤井達吉現代美術館 二階展示室二
- 主催…碧南市・碧南市教育委員会・碧南市藤井達吉現代美術館
- 協力…岩津天満宮 碧南市文化財保護審議会
- 構成…第一章 服部長七、第二章 人造石遺産
- 出品点数…三一点

現在、服部長七に関わる資料の多くは岩津天満宮が所蔵されている。本展でも出品資料の多くを岩津天満宮より借



対談の様子

用した。

（イ）関連行事

- ・対談「服部長七の波乱に満ちた生涯を語る」
話し手…服部憲明氏（岩津天満宮宮司）
司 会…浅井久夫氏（碧南市文化財保護審議会委員）
実施日…二〇一九年一月一六日
- ・講演会
講 師…天野武弘氏（愛知大学中部地方産業研究所研究員、産業考古学会会長）
演 題…日本の近代化を進めた服部長七と人造石工法（長七たたき）
実施日…二〇一九年一月二日
- ・ワークショップ「長七たたきをつくろう！」
講 師…稲垣尚人（当館ミュージアム・ティチャー）
実施日…二〇一九年一〇月二六日

展示のねらいで述べたことを関連行事でも具体化した。服部長七の人物像については、対談という形式を採った。浅井久夫氏を聞き手に、服部長七の御係累にあたる服部憲明宮司に、伝記で触れられていない部分を含めてお話をいただいた。

また服部長七が考案した人造石・同工法については、天野武弘氏による詳細な講演と、長七たたき（人造石）をつくるワークショップを行った。

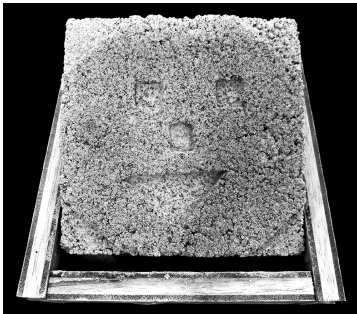
特にワークショップは、小学生以上の参加者により「長七たたき」を制作した。人造石は、消石灰と真砂土（風化花崗岩、サバ土）を原料に水を加えて練り、この練り土を叩き締めたものである。材料は一般に入手でき、事前にホームセンターで消石灰と真砂土（山土）を購入し、天野武弘氏より消石灰と真砂土と水の配合比（重量比）について御教示を得た。また担当講師が参加者分の木枠（内寸14㎝四方、深さ4㎝）を用意し、ワークショップに臨んだ。

当日は、担当講師の指導により、まず個人それぞれが木枠底板に発泡ウレタンのパネル片をはりつけ、図柄を作った。次に、消石灰と真砂土を配合して水を加えてよく混ぜ合わせた。最後に、木枠に練り土をつめて、「たたき」といわれるように、叩き締めた。こうして約一週間後、参加者思い思いの「長七たたき」が完成した。

このワークショップでは、机上の説明だけではなく、自ら実践して「確かに固まる」ことを理解していただくことができた。個人的には、水の量がもう少し必要だったので、その分人造石が少しポロポロと崩れてしまった、などの



ワークショップの様子
消石灰と真砂土に水を加えて練る



ワークショップの様子
参加者（小学生）が制作した長七たたき

感覚を得ることができた。また服部長七の人造石工法に関しては、多くの人夫を動員して、石と石の隙間に練り土を挟んでいくという作業工程上、材料はさることながら、現場で安定した練り土を作り出していくことの難しさも想像することができた。

二 碧南市における服部長七の事績が現在の碧南市に与えている事柄など

次に、現在の碧南市出身である服部長七の事績が、現在の碧南市にどのような事柄を与えているのであろうか。まずは服部長七が没して以来の当地での顕彰について、次に学校教育の様子的一端を取り上げたい。

(一) 顕彰

①「人造石発明者 服部長七翁之碑」(新川神社、元精界寺)

一九一九(大正八)年七月二四日、出生地に近い精界寺で服部長七の葬儀が執り行われた。その翌年、長七の遺徳を偲び門人故旧により同寺境内に「人造石発明者服部長七翁之碑」が建立された。碑は以来、同寺境内に長らくあったが、九〇余年を経て損傷が甚だしくなり、二〇一〇(平成二二)年に新川神社(碧南市千福町一丁目)境内に修復・移設された。なお新川神社では、碧南市新川地区出身の服部長七・岡本兵松・角谷安兵衛を祭神としている。

②「服部長七生誕の地」碑(御鋳社)

「人造石発明者服部長七翁之碑」が移設された翌年の二〇一一(平成二三)年に、出生地近辺とみられる御鋳社(碧南市西山町七丁目)境内に「服部長七生誕の地」碑が建立された。御鋳社と地元の西山区の協賛のもと、岩津天満宮・岡島良平氏が建立したものである。岡島氏は長七と昵懇であった元新川町長岡島兵作の孫にあたり、碑の撰文・字も担われた。

(二) 学校教育

服部長七の出生地は、現在の碧南市立新川小学校通学圏内にあたり、同校で折に触れて顕彰されてきた。もともと新川小学校の正門前(現在の新川交番付近)には「征清記念碑」が品川弥二郎子爵(一八四三～一九〇〇)の題字を得て人造石で建立されていたが、昭和初年に取り壊されたという。こうした人造石の痕跡が新川小学校の校地(精進園)に現存している。二柱一対の門柱で、現在は保護のためコンクリートで覆われている。その一部に覗き窓があり、人造石を確認することができる。



小学生が作った人造石(左上)と
人造石の旧門柱



「服部長七生誕の地」碑



「人造石発明者 服部長七翁之碑」



前浜新田干拓堤防護岸(碧南市川口町六丁目)



「長七たたきの小径」(碧南市役所北西隅)



この同じ校地内に、一九九九(平成一一)年に当時の新川小学校六年生が作ったピラミッド状の「長七たたき」が残されている。また同じ時に、型枠を使って作ったブロック状の「長七たたき」百個を使用して、碧南市役所敷地北西隅に「長七たたきの小径」が設置された。

このように、碧南市域では、服部長七翁ゆかりの関係者や、寺社の檀家・氏子の方々により崇敬されてきた。また、地元の小学校を中心とした学校教育のなかで、折に触れて顕彰されてきたのである。

三 本展に関連した番頭・岡本小治郎氏の史料内容や前浜新田の発見経緯、それを受けての今後の取り組み目標

さて、三章では本展に関連して明らかになったことや今後の取り組み目標についてみておきたい。

(一) 岡本小治郎氏所蔵資料(岡本隆史氏蔵)

人造石工法は、鉄筋コンクリート工法が普及するまでの過渡期に重要な役割を果たしたことで、それを考案した服部長七に焦点があてられてきた。しかし、長七が設立した服部組の経営実態について、先行研究のなかには今後の課題として指摘したものがある²⁾。

そこで本展では、当時服部組で番頭を務めた岡本小治郎(一八六〇～一九三四)の御係累から所蔵資料の一部を借用・展示した。展示物は二点で、岡本小治郎氏の後年の肖像写真と一九〇一(明治三四)年の服部組辞令(副監督長に任じる)である。しかし所蔵資料には全国各地の現場で詰めた小治郎と服部長七の往復書簡などが多数残されている。書簡そのものが一次史料として貴重であり、今後の地道な調査研究が必要であると感じている。

(二) 前浜新田干拓堤防護岸 発見の経緯

本展の展示準備中、碧南市前浜新田にて服部長七が手がけた人造石工法の遺産を確認し、二〇一九(令和元)年七月一日に報道発表した。その過程で、これを取材していた地元ケーブルテレビの株式会社キャッチネットワークと株式会社オフィスげんぞう(宮本雅文氏)の協力を得た。天野氏には、岩津天満宮所蔵資料から一九〇一～〇二(明治三四～三五)年に服部長七が手がけた箇所と一致することを指摘いただき、服部長七が手がけた人造石護岸であることが確認された。確認された人造石護岸の全長は二か所で計五〇〇メートル以上にのぼる。もともと前浜新田は、一八二九(文政一二)年に造られた(堤が完成し試作が終わった)。当時は当然海に面しており、護岸は土盛りであったと想定される。しかし、一八九六(明治二九)年から一九〇一(明治三四)年頃までたびたび暴風雨があり護岸の

(福沢和義)

考案者・長七の出身地碧南で



建設現場の状況を確認するための映像配信サービス



建設現場の状況を確認するための映像配信サービス

お問い合わせ

- ・中東建設の最新施工レポート
- ・日本の建設現場の最新情報
- ・ウェブカメラによるリアルタイム映像配信サービス

<http://coohi.construction.jp/>

<http://coohi.coohi.construction.jp/realtime.html>

info@coohi.construction.jp

損壊があつたという。そうしたことから、人造石工法で堤防の補強工事が行われたのである。その意味では、前浜新田の外周の多くが人造石工法で工事されたとみられるが、一九五三（昭和二八）年の一三号台風や一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風により大きく損壊しており、現存する人造石工法の堤防のなかで碧南市川口町六丁目付近が現状間近でみることができるところとなっている。しかし、川口町一丁目に続く住宅地の裏側の箇所でも、人造石工法の護岸が断続的に続いており、延長はまだ長いことが確実である。

この報道発表を受けて、地元の有力紙である中日新聞にも大きく取り上げられた。幸い岩津天満宮で例年執り行われる長七忌の日（七月一八日、この年は「御大礼記念服部長七翁百年祭」の日）に掲載されることになった。

(三) 今後の取組み目標

服部長七の出生地・碧南で初めて確認された人造石遺構の前浜新田干拓堤防護岸（碧南市所有）であるが、他市町の状況も踏まえつつ、適切な保存措置が講じられる必要がある。

事に伴い築かれたもので、先行研究では「服部長七の手による現存最古の人造石構造物」とされたものである。しかし筆者が見学した二〇一九年七月現在では、私有地内にわずかに上部を残すのみであり、近隣も広島港の倉庫群とあつてその存在を知る者は皆無であつた。このように、貴重な人造石遺構とは知られず遺構が滅失していく事例は多いであらう。

一方、長七が一八九三〜九四（明治二六〜二七）年に手がけた三重県・四日市旧港の防波堤は、南へカーブを描く曲線式の波止場を人造石で築いたもので「潮吹き防波堤」とも呼ばれ、関係者の努力により一九九六（平成八）年に重要文化財に指定されている（四日市旧港港灣施設）。

また愛知県内では、豊田市の百々貯木場は一九一八（大正七）年に主に人造石工法によって築造されたもので、豊田市指定文化財となっている（但し服部長七が手がけたものではない）。

このほど愛知県大府市では、人造石工法による明神樋門（一九〇一年築）が登録有形文化財へ登録された。こうした人造石遺構をめぐる文化財としての取扱いを参考に、碧南市前浜新田干拓堤防護岸の現況を把握し、登録有形文化財への登録を念頭に置いた措置も検討している。

以上のように、服部長七が手がけた前浜新田干拓堤防護岸の発見や本展の開催、並びに令和二年七月に開催されたシンポジウム⁵での議論を通じて、当市で長らく行われてきた服部長七の顕彰を継続するとともに、長七が手がけた人

造石遺構の保存についても強く意識していきたい。

(註)

- 1 中根仙吉「服部長七伝」『碧南市史料』第八輯、一九五五年
 - 2 樋口輝久ほか「中国地方の人造石工法―服部長七をめぐる人間関係―」『土木史研究論文集』二六巻（土木学会、二〇〇七年）
 - 3 註2に同じ
 - 4
 - 5 「明神樋門、明神川逆水樋門」二基（大府市横根町所在、愛知県所有）令和二年七月一七日文化庁審議会答申
- シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第三八回「服部長七と人造石工法―産業近代化の基礎づくりを担った土木技術―」（令和二年七月一九日、於碧南市立大浜公民館、主催 中部産業遺産研究会、後援 碧南市教育委員会ほか）

〔初出〕『シンポジウム 日本 の 技術史をみる眼』第三八回「服部長七と人造石工法」産業近代化の基礎づくりを担った土木技術——講演報告資料集——（中部産業遺産研究会、二〇二〇年七月一九日）

シンポジウム「日本 の 技術史をみる眼」第三八回実行委員会の依頼に基づき執筆した。本紀要への収録にあたっては、レイアウトや若干文言を変更したが、論旨に変更はない。

(付記) 歴史系企画展「没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産」の開催、並びにシンポジウム講演報告資料集の執筆にあたりご協力を賜りました。所蔵者並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます(敬称略)。

中部産業遺産研究会 シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第三八回実行委員会
浅井久夫 天野武弘 岡本隆史 八田健一郎 服部憲明 宮本雅文

「没後一〇〇年 服部長七と近代産業遺産」展の開催と前浜新田干拓堤防護岸の発見